

ぬまづ産業振興プラザの6年間を顧みて —地域活性化の法則は?—

山 本 公 一

まえがき

筆者は沼津地域に設置された東海大学開発工学部の教員に就任以来、大学近隣の地域活動に関連を持ち続け、地域の方々から諸々の相談を請けたり、筆者からも提案を行ったりしました。その間に「ある共通的」な現象を発見しました。すなわち「他力本願的思考」と「隣の芝生は青い思考（他所がやるからの思考）」です。これについて、解説の必要はないと思いますが、いかがでしょうか。また、演繹的な思考が常に付き纏ってもしました。何処かで、誰かが作った「方程式」にパラメータを当て嵌めて、うまくいかない、うまくいかないの連呼になっていました。

このような経験を抱きながら大学の定年退任時期を迎えようとしていた頃、「ぬまづ産業振興プラザ（以下プラザ）」で地域の振興支援事業を手伝わないかという依頼があり、年齢のことも考えて「5年間程度なら」とお引き受けをしました。以来上記のような経験を参考にしながら、筆者なりに、沼津地域の振興に参画させて頂き、無事に予定の年限に到達することができました。

本資料は、大学の現役教員時代およびプラザでの経験を踏まえて、地域の振興とは何か、如何にすれば地域は発展するのか、そのためには地域人はどのような行動を行なうべきか、などを纏めたものであります。プラザの卒業論文（短い卒論ですが）の積りで作成しました。今後の地域活性化に役立てていただければ、筆者の望外の喜びであります。

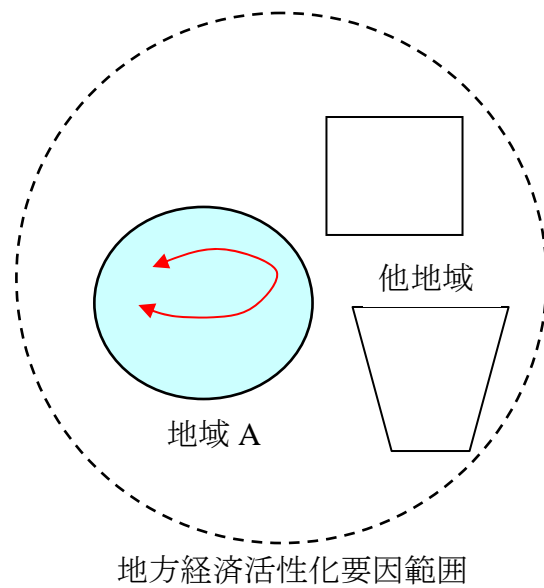
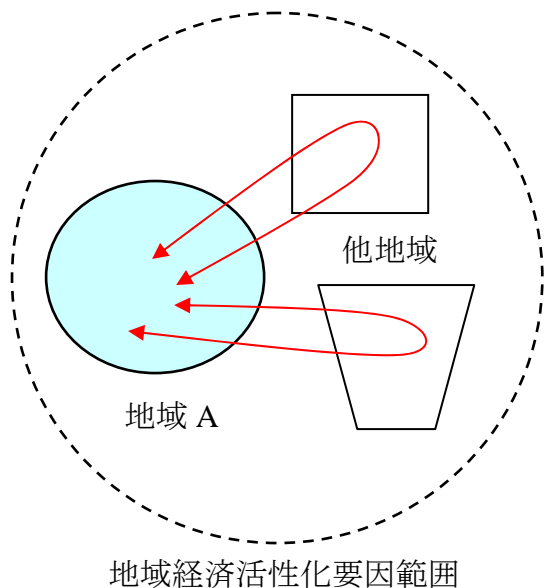
1. 地域と地方の違い

まず「地域」の定義を明確にしておきましょう。英語で言いますと、“area”、“region”、あるいは、“district”に該当します。この言葉と同類のものに「地方」があり、英語で言いますと、“local area”、になります。すなわち、前者の「地域」には限定がありませんが、後者の「地方」は限定されることです。言い換えますと、「地方」は「中央」に従属する場合に用いられます。中央官庁に対する地方官庁のように中央あつての地方となります。

沼津地域は沼津に基点を置いた広範囲な地域をさしますが、沼津地方は行政地理（？）で示すと沼津市そのものになります。観方を変えますと、「地域＝開放的システム（open system）」であるのに対し、「地方＝閉鎖的システム（closed system）」なのです。

したがって、地域産業の活性化と言いますと、対象とする地域の企業特性や地域そのものの特性を活かして、該地域を中心に広い範囲までに影響を及ぼすこととなりますが、地方経済または地方産業の活性化と言うと、その地方の範囲内に（例えば沼津地方なら沼津市のみに）限定されることとなりますから「地域産業の活性化」に比べて活性化の要因・要素数が少なくなり、それだけ活性化の程度が小さくなります。

これは要するに着眼範囲の問題でもあります。次ページの図を見てください。「地域」



の場合は他の地域までも考慮の対象として自分の地域の経済や産業を振興する戦略を取り上げます。日本経済が右肩上がりの往時のように、工場や企業を誘致すれば何とかなるといった戦略は、現代ではもう通用しません。また、製造業の活性化といっても単独では困難になりつつあります。どんな製品を製造するのか、製造した製品をどんな方法で販売するのか、材料はどこから仕入れるのか、などなどのように、関連する業種との複眼的な振興策の採用が必要になっております。

そうしますと、どうしても、活性化の要因の数が多くなる「地域」なる概念を利用せざるを得なくなります。「地域」なる用語を使用する、沼津地域産業振興協議会の位置付けは、まさに、ここにあるのではないのでしょうか。なお、ついでですが、筆者の専門の「システム工学」では、このような捉え方を「多数の要素間の創発的活用」とよび、できるだけ考える範囲を広くして、目的とするシステム実現に疎漏がない様に努めます。

2. 地域を取巻く社会経済環境

ここで地域を取巻く社会・経済のマクロ環境を眺めてみます。1980年代から21世紀初頭におけるの大枠の変化は

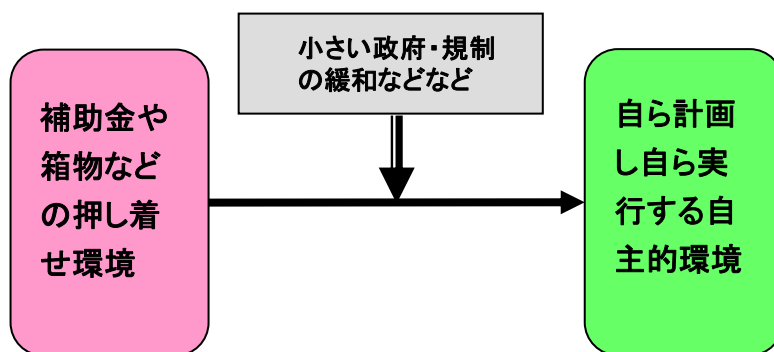
- ① ソヴィエト的な社会主義思想の崩壊
- ② 第2次大戦後に挙げた福祉国家論の衰退
- ③ 地球温暖化など自然環境の異常な変化に見受けられる機械論的自然感の発生

が挙げられます。これは要するに「市場主義優先思想」への転換です。小さな政府論の台頭です。地方のことは地方でという地方分権（地域分権とは言っていない？）症候群の始まりです。

それまでの地域の活性化の「要素」は補助金という「金」でした。「どんどんやれよ、国が援助するから」という構図でした。そのためか、本資料の“まえがき”に上げました演繹的な地域振興策を探ることになったのでしょうか。ところで、その成果はどうだったのでしょうか。果たして本当に身のある地域の活性化はなされたのでしょうか。言うまでもなく活性化は表面的でメッキにしか過ぎなかったのです。

そこに上記のような市場主義、競争主義政策が取り上げられ、「成功者の足を引っ張る社会は発展しない」ということにもなりました。さらに、地方で出来るものは地方で、民で出来るもの民で、と掛け声が大きくなりました。この掛け声は、まさしく、地域活性化あるいは地域振興の引き金になる筈でした。ところが現実には異なりました。その理由の大半は従来思想（補助金を得て対応しようとする考え方）から脱却できないことであつたと思います。さらに、いわゆる、あらゆる面における「格差」の形成が助長され現在に至っておりますが、現在はそれが余りにも表面に出過ぎておるように思います。

すなわち従来のような補助金環境から、下図に示すように、自分達で計画し実行する自主的な環境（筆者はこれを「自前主義」と呼んでいます）への移行がなされているのが現代ではないでしょうか。さらに、先に挙げた機械的自然観が自然的自然観へと回帰しているのも今の時代です。さらに市場経済最優先から振り子が戻り始めた時代でもあります。したがって、このような環境の変化を考慮して地域の振興策を考えるべきでしょう。



地域を取り巻くマクロ環境の変化

3. 地域活性化の要因

地域の活性化は、筆者が幾度となく提言させて頂いているように、何かの要因・要素を火種にしないと決して上手くは実行できません。その基本的なものが前記の環境になりますが、これを具体的に表現しますと「協調的競争」、「創発的協創」、または、「共生」による取り組みとなりましょう。

このような大きな枠組みの中で地域の個性を重視する、すなわち、該地域に適した諸々の要素を種にして活性化に取り組みます。そのような種になると思われる要因を思いつくだまに列挙しますと、例えば、以下のようなものがあります。

- ① 地場産業要因
- ② 観光要因
- ③ 教育要因
- ④ 健康・福祉要因
- ⑤ 自然環境要因
- ⑥ 歴史的・文化的要因

以前に筆者は、活性化要因を探しても見つけられない場合の対応について、自地域に適すると思われる要素を「開発」すれば良いではないか、と発表したことがあります。この考えは間違いでした。なぜならば、この考え方は旧箱物思想に通じ、何ら新時代に適さ

ないからです。最も、旧時代の考えで構築された「箱物」を①～⑥などの要因を考慮して新時代の考えで活用することはありますが（例えば北海道の夕張市の例）。

さて、次なる課題はこれらの要因をどのようにして選ぶかであります。そこには次の2つの考え方があります。すなわち

(a)地域の現在を変えるように利用するか（地域の開発）。

(b)地域の現在の延長線で利用するか（地域の協創生）

通常は(a)を用いるのですが、筆者は(b)を推奨します。何故ならば地域の振興は砂漠の上で行なわれるのではなく、生身の人間が生活をしている空間・時間が対象になるからです。これは「地域の人々が地域を創生する」ことになります。

4. 人々が地域を創生する（地域活性化の法則）

地域の振興は、地域の有する特徴を種にして、地域住民が自ら計画し自ら実行する「自前主義」でなければなりません。すなわち、地域のイメージを形作り、地域をそれに近づけるための実行計画を作成し、且つ、それにしたがって行動する「カリスマ的人材」が欲しくなります。もしそのような人材が存在しないときに「カリスマ的組織」が必要でしょう（筆者はプラザをこのような組織にする積りで活動しましたが）。

行政機関にこのような地域の活性化に一肌脱がれる方がおられれば結構なのですが、どちらかと言えば、官は継続性を重視する傾向があり発想や着想が固定的になりがちです。これに対して、民は常に日々の営みに直面していることから、現状を感覚的に把握することが可能であるため、発想が具体的かつ柔軟になります。まずは「民」主体ですすめ、後に行政を参加せしめるのが望ましいと思います。また「民」の場合は、自己を棄てて自己を表現するといった、カリスマ的性格が比較的発揮しやすくなりますが、「官」ではそうもいかないように思います。

そうしますと活性化の組織ですが参加する人々が何か得意とする分野のエビリティが発揮できる協調可能な「ラグビー形組織」が望ましく思います。その際のカリスマ的な役割を果すのが司令塔役の「スタンドオフ」（個人でも組織でも良い）でしょう。

活性化の内容や方法論は地域毎に異なります。しかし、そこには今まで述べてきたような共通的な項目があります。それは

地域活性化≡自前主義 ∩ (現場 ∩ 現実 ∩ 現物)≡自前主義 ∩ (現場主義)

になる法則めいたものが存在するように思えてなりません。これは最近聴講させて頂いた商店街活性化に関するセミナーでも議論されていました。

なお、ついでですが、“まえがき”に挙げました活性化の方程式は存在しないように思います。強いて言えば、上記の法則めいたものから、夫々の地域の特質などをパラメータにして、具体策を講じることが該当するように思いますが。

あとがき

以上、プラザの6年間で経験したこと、感じたこと、調べたこと、勉強したことをもとに、地域活性化に関する考慮しなければならない事項を基本法則の形で示させて頂きました。良く云われることですが「町作りは人作り」です。「人」こそ地域の活性化を左右する最も大きく、何ものにも替えがたい要因です。プラザのお手伝いをお受けするときに唯一

条件を付けさせて頂いたのが人材の育成でした。この願いは間違いなかったと今でも思っています。

最後に、筆者が考えている沼津地域の活性化の要点を付録に添付しておきます。またこの資料に関連すると思われる参考資料名を併せて記載しておきました。皆様方の今後の活動にお役に立てれば幸いです。

この6年間、多くの方々のお世話になりました。いちいちご芳名は挙げませんが、ここで厚く御礼を申し上げて筆をおきます。大変有難うございました。

(以上)

(付録)沼津地域活性化の私見(下記資料①から抜粋)

風土的特徴:水・海・山による湿潤温暖

歴史的特徴:北条早雲・臨濟宗白隠・兵学校西周・沼津御用邸・千本松原長円・・・

産業的特徴:水産・水産加工・茶・茶加工・蜜柑・バイオ・・・

学術的特徴:東海大学・沼津高専・富士常葉大学・日大・遺伝研・ファルマバレーセン
タ・・・

観光的特徴:後背地に伊豆地域と富士山地域



健康と食と癒しをテーマにした地域の活性化

参考資料 ①山本公一；システムとして見る地域の活性化（講演資料）、平成18年11月

②山本公一；アーケード名店街活性化に関する私見、平成18年2月

③山本公一；地域の活性化と産業集積（私見）、平成18年6月